

木内 敏夫 木路 修平

(日本陸連強化副委員長、ホクレン・ディスタンスチャレンジ大会統括ディレクター)

(日本薬科大学講師、ホクレン・ディスタンスチャレンジエントリー担当)



草創期から知る2人に聞く ホクレン・ディスタンスチャレンジの 『これまで』と『これから』

ホクレン・ディスタンスチャレンジは、2003年に誕生し、今年で14回目を迎えます。全5戦でスタートしたこのシリーズは、翌年から別開催されていたミドルディスタンスチャレンジシリーズとの一本化により中距離種目のエントリーも増加、その後、3000mSCや競歩種目も加わり、今や日本の中長距離シーンには欠かせないシリーズへと成長を遂げてきました。ここでは、「創設前夜」といえる時期から、現在に至るまでシリーズの運営に尽力してきた木内敏夫さん、木路修平さんに、ホクレン・ディスタンスチャレンジの『過去、現在、未来』について、お話をうかがいました（本文中の所属等は当時のもの）。

取材・文／児玉育美（JAAFメディアチーム）

写真／陸上競技マガジン（競技写真）、

児玉育美（インタビュー）

「世界標準を経験させたい」 ホクレン・ディスタンスチャレンジ 誕生前夜

——ホクレン・ディスタンスチャレンジ（以下、ホクレンDC）は、2003年にスタートして、今年で14回目となります。陸連時報2003年9月号に掲載された第1回大会の報告書には、「選手の逞しさと調整能力を養い、トラック競技で世界と戦うことのできる人材の発掘と育成を目的とした競技会シリーズ」との記載がありますね。

木内：ホクレンDC自体は、2003年が1回目ですが、実は、その前に原型のようなシリーズを、中距離でやっていました。

木路：2002年にスタートしたミドルディスタンスチャレンジですね。中距離種目だけでサーキットを組み、各大会

の順位や記録に応じてポイントの与え、総合成績を競うというシリーズです。関西実業団記録会や日体大記録会などの中距離種目を使わせていただき、6月中旬から7月上旬までに全5戦を設定し、選手たちが転戦しながら記録を狙っていくことによって、低迷していた中距離の底上げと活性化を図ろうとしたものです。

木内：もともとは、中距離のヨーロッパ遠征があったんだよね。

木路：はい。このミドルディスタンスチャレンジが創設された背景には、実業団でやっていた中距離のヨーロッパ遠征がありました。試合が各地で行われているこの時期のヨーロッパへ渡り、競技会を転戦しながら中距離種目に不可欠な戦術や駆け引きを学んだり海外での移動や生活を含めた経験を積みませたりすることを目的としたもので

す。いったん中断していたものを1996年に復活させて、日本選手を受け入れてくれる競技会と繋がりをつくりました。ルートができたのはよかったのですが、それによって競技のレベルを問わず渡欧する選手が増え、2000年前後には「日本人が多すぎるから」と出場を断られたりするケースが出てきてしまったんです。そこで、「じゃあ、国内で転戦できるシリーズを組んでみたらいいんじゃないか」ということになり、2002年に始まったわけです。

——木路さんは、当時、大塚製薬のコーチでしたか？ どういうお立場で創設に関わっていたのですか？

木路：えーと、ミドルディスタンスチャレンジ担当（笑）。陸連でもなく、実業団でもなく、中距離強化でもありません。もともとヨーロッパ遠征を復活させたときに指揮をとったのが大塚製薬の河野匡監督で、以降、転戦に際してのAR（代理人）業務を監督の代行として、私がやっていたんです。その過程で、いろいろな状況や問題を把握していたということもあり、国内での実施に関わることになりました。——そこから、どう繋がってホクレンDCに？

木路：そこは、当時、日本陸連事務局にいて、強化委員会企画情報副部長をやっていた村尾慎悦さんの尽力が大きいですね。僕自身は、村尾さんと「長い距離をやるんだったら北海道ですね」って話はしたことがあるんです。7月ごろの北海道はヨーロッパの気候に似ているので記録も狙えるし、長距離では北海道で長期の合宿を組むことが多いので、これまでに世話になっている地域でやったら、面白いことができるんじゃないかと思っていたので。ミドルディスタンスチャレンジのあと、内輪で見る報告書にそういった

ことを書いて出したのですが、そうしたら、ホクレンがスポンサーになった「ロングディスタンスチャレンジ」が、翌年にはスタートしていました。——それがホクレンDCというわけですね。2004年にはミドルディスタンスチャレンジも統合されました。

木路：中距離の場合は学生の出場も多くなるため、北海道で実施すると転戦できないケースもあるかなと思っていたので、当初は分けて実施することをイメージしていました。ただ、シリーズ自体をグレードアップさせようということと、ホクレンさんのご理解もあって、最終的にホクレンDCとして一本化されました。

——そうしたなかで、3000mSC、5000mWや10000mWが加わったり、特殊種目として600m、1000m、3000mが行われたりと、その時々に応じて実施種目の幅も広がっていったわけですね。木内さんは、日本陸連副強化委員長のお立場で、このシリーズの大会統括ディレクターでもあります。どういう大会を目指してきたのでしょうか？

木内：私自身は、ヨーロッパの転戦も継続してほしいと思っているんです。各大会のレースディレクターとの人脈は、それこそ木路くんたちがものすごく苦勞して、20年以上かけて築き上げてくれた繋がりなので、それは大切にしたいなと。でも、ヨーロッパの大会の場合は、それなりの持ちタイムがないと、ウエイティングにかかるどころか全く相手にしてもらえないことが多いんですよね。だから、そんなに出かけても、“1.5流”以下のレベルではレースに出られない。なので、まずは、国内でしっかりと力をつけて、先方から受け入れてもらえるレベルまで底上げできるような仕組みをつくらなきゃいけないなと思っていました。

木路：当初は、グローバルスタンダードのシステムでこの大会で運営して、それを経験したうえで海外転戦してほしいなと思っていたんですよね、予行演習といった感じで。

木内：選手はもちろんなんだけど、高校、大学、実業団など各層の指導者にも、実際にヨーロッパで行われている大会がどんな感じのものなのか、知ってもらえたらいいなと思っていましたね。

——世界標準の感覚を身につけてもらいたいということですね。

木路：はい、それをヨーロッパに行っただけで初めて経験するのではなくて、国内で体験しておいてから行ったほうが、メリットも大きいということです。例えば、レースにおけるベースにしても展開にしても、レース以前のエントリーをはじめとするホスピタリティの部分でも。ホクレンDCでグローバルスタンダードを経験させてみましょうと。

木内：例えば、海外では送迎ひとつとっても、自分で問い合わせる手配するのは当然だし、手配していても予定時間にそこにいなければ置いていかれちゃいますからね。そういったことやエントリー時の交渉などを自分で対処できるようにしておいてほしいなと。——回数を重ねていくなかで、参加選手に変化はありましたか？

木路：僕らの当初の意図からしたら、ホクレンDCはホスピタリティが完璧すぎて、予行演習にはならない（笑）。運営される各自治体が本当に手厚くやってくさっているんで、受け入れ体制として完璧なんです。なので、想定とはちょっと違う形になっていますね。ただ、行く側としてはありがたいことですし、それはそれでいいのかなと思っています。

『ヨーロッパでやっているような大会にしてみたかった』（木内） 『受け入れ体制が完璧で、想定と違ったけれど（笑）』（木路）



【PROFILE】

木路 修平（きじ・しゅうへい）

1967年生まれ、京都府出身。京都・洛南高校で中距離に取り組み、筑波大学では箱根駅伝にも出場。大学卒業後は大塚製薬陸上競技部に所属、現役を退いてからはコーチとして活躍し、多くのトップ選手を育てた。2010年から筑波大学大学院人間総合科学研究科でスポーツ健康システム・マネジメントを専攻、2013年より日本薬科大学講師、同陸上部コーチを務める。ホクレン・ディスタンスチャレンジには草創期から関わり、大会全体のエントリー業務を担当している。



【PROFILE】

木内 敏夫（きうち・としお）

1949年生まれ、埼玉県出身。埼玉・熊谷工業高校時代から長距離選手（旧姓：宮下）として活躍、順天堂大学時代には5000mで日本インカレ4連覇したほか5000mで日本選手権優勝（1970年）、クラレ所属時代の1972年には10000mで日本選手権を獲得するなどの実績を残した。1990年から富士通陸上部監督として多くのトップ選手を輩出、総監督を経て現在は顧問を務める。日本陸連の強化にも長年携わり、世界選手権ほか国際大会日本選手団ヘッドコーチ等を歴任、現在も強化副委員長として活躍する。ホクレン・ディスタンスチャレンジでは大会統括ディレクターのほか各大会のMCも務めている。

『Aレースを高水準にして、レースディレクターの裁量で日本人を入れては?』 (木路) 『ヨーロッパで我々がやられてきた逆パターンだ』 (木内)

転戦のなかで身体をつくり 記録を狙っていく

——スタートした段階では5地区での開催だったのですか?

木内: 最高で6地区ですね。最初は5つかな、北見が入っていなかった。

木路: 最初は、札幌、釧路、士別、深川、網走です。

——現在は、士別、深川、網走、北見の4大会となっています。

木内: 2011年以降は、この全4戦でやっています。会期の順番は変わったりしていますが。

——1カ月くらいの期間をかけて開催していた時期もありますね。選手たちは北海道にずっと滞在して大会を回っていくという感じだったのですか?

木内: 以前、ヨーロッパではベースキャンプをおかずに各地を回っていたんです。でも、それでは疲れるということで、ある場所にベースキャンプをつくり、そこから行って帰ってくるというようになりました。それと似たような感じでしょうか。今は全4戦ですから、2大会ずつ前半と後半に分けて、一箇所に泊まって移動するケースが多いかな。網走・北見はどちらに泊まっても移動できるし、深川・士別なら旭川に泊まればどちらにも移動できます。なので、それも踏まえて、「この試合で調整して、ここで狙うぞ」とかいうことができるような種目の組み方をしています。最初に3000mやってもらって、次の大会で5000mとか10000mで記録を狙えとかね。これは、特に日本選手権に関係できない競技レベルの選手たちですね。出た人たちの場合は、日本選手権後、どうこの大会に出て、記録を狙っていくか、それぞれの目的によって変わってきます。



——転戦して、レースに出ていくことで力をつけつつ、競技経験を積んでいく…?

木内: そうです。ヨーロッパに行っても、そのまま生かされるようにね。そうやってスケジューリングとか転戦とかを経験してもらわねえです。レースを重ねていくことで力をつけていくのか、ここと決めて記録を狙うために出るのか。どういう形でこのシリーズにチャレンジするかは、それぞれに考えてもらえればいいと思っています。

木路: 当時の実業団の海外遠征って、長いときだと40日くらい行っていました。「試合をしながら、つくっていく」という感覚を養わせたかったというのもあって。

——鍛えながら、チェックを試合ですて、その結果を見て、鍛えて、またレースでチェックをして…。

木路: そのなかで身体をつくっていく、「この大会で記録を狙う」という感じだったんです。

木内: 日本だと、自分の専門とする種目に偏ってレースに出る傾向があるのですが、自分が狙っていない種目ややったことのない種目—1000mとか2000mとかね—にも出てほしいなという意図も込めてスケジューリングしています。「メインはこれ」というのはもちろんあるけれど、守備範囲を広げて、それによって、メインをさらに極めていくというほうが通用していくと思うので。

——長距離選手としてのベースを広げつつ、土台を高く盛っていくための位置づけという形での大会なのですね。

木路・木内: そうそう。

木内: 小林史和 (NTN) が1000mで出した日本記録 (2分19秒65、2005年) なんかは、網走の競技場にプレート置いてもらっていますが、そういう特殊種目を入れることは、選手にとってもいい機会となりますよね。あとは4×800mリレーをやるうよとか、4×1500mリレーをやるうよとか、そういう話も出ています。そういうのも、中距離選手がたくさん集まるこの大会だから、できることだと思いますね。

高水準のシリーズ記録 標準記録突破の事例も多数

——ホクレンDCのシリーズ記録 (P7参照) を拝見すると、記録のレベルはかなり高いことがわかります。

木路: そうですね。日本記録も高校記録、歴代上位記録なども出ているし、オリンピックや世界選手権などの参加標準記録をここで切っている選手もけっこういます。また、日本選手権後の開催ということで、ここで標準記録を突破して出場が可能となったケースもあります。2005年の三津谷祐 (10000m、トヨタ自動車九州) とか、2008年の赤羽有紀子 (5000m、ホクレン)、2011年の絹川愛 (10000m、ミズノ) などのレースは印象深いですね。

木内: 今年の場合は、7月11日までOKでしょ? だから士別 (7月3日) と深川 (7月7日) と選挙の関係で月曜日にずれた網走 (7月11日) もぎりぎり期限内。深川でやる3000mSCあたりで突破する選手が出てくる可能性は十分にあると思いますね。

——記録を狙うということでも成果は残しているわけですね。転戦を使って強くなっていくという意味でも成果は出てきていますか?

木路: どちらかという、記録が狙える大会としてのほうが認知されてしまっている感じはありますね。

木内: そうかもしれない。でも、レースにだけ出て、そのまますぐに帰ってしまうんじゃなくて、できれば合宿などを組み込んでほしいなという思いはあります。

木路: ただ、マラソン練習のための合宿をしながら3000mに出るとか、そういう使い方をしてくれるチームや選手もいます。例えば、「昨日30km走をやったので、今日は3000mに出ます」とか、「今日は5000mを2本走りたいので、Bを走ったあと、Aを走ります」とかといったように。なので、そういう点では、いろいろな使い方をしてもらっているのかなと思いますね。——質の高いタイムトライアルをする感じですね。

木路: そうですね。そうした相談に応じての調整もしています。例えば、BレースとAレースの間は、1500m1本入れるくらいのインターバルがいいのか、それとも十分に休息時間をとれるようにしたほうがいいのかなど。

——タイムテーブルもその都度変えているのですか?

木路: 組み分けを前日にやるので、タイムテーブルも前日に決めることになるんですよ。

①2008年深川大会10000mで北京五輪A標準を突破した福士加代子（ワコール）
 ②2005年深川大会10000mを制した三津谷祐（トヨタ自動車九州）。選考過程の不備により、いったん取り消されたヘルシンキ世界選手権代表の座を取り戻す快走だった
 ③小林史和（NTN）は2005年網走大会10000mで日本記録を樹立



選手が少しでもよい条件で走れる スケジュールングを

——参加人数は増えてきているのですか？

木路：増えています。一気に増えてきていますね。昨年の1304人は過去最高です。

木内：去年は、網走が特に多かった。大学生がすごく多かったんです。私は大学の行事がどうなっているのか詳しくはわからないのですが、試験が終わったあととか、そういう理由で、このレースなら間に合うということで、おいでになったのかなと思いますね。

木路：473人ですね。網走は、確か最初のエントリーは600を超えたんです。それが北見でタイムが出たので出場をやめたり、2戦続けて走れないという選手がキャンセルしたりで、結局この人数に落ち着いたという経緯があります。ただ、昨年の出場者数を見ると、第1・2戦の士別（106人）・深川（291人）に比べて、後ろの2大会が400人台（北見434人、網走473人）なので、今年はこれをどう前倒しするかということを考えています。

木内：今年は、全大会に男子10000mを入れました。持ちタイムによって分散させるよう進めるつもりです。

木路：選手にとって最もよい状況に振り分けるための施策です。1大会に出場者が偏ると、組数を増やさざるを得なくなりますが、そうするとペースメーカーを用意することができなくな

てしまうのと、組数の関係で暑い時間帯に走らなくてはいけない組が増えてしまう。これを避けるために、4大会全部に10000mを入れて、士別・北見の標準記録を30分00秒00に、深川・網走は28分45秒00にしました。後者の大会には日本のトップしか出られないので、2組くらいで終われると思っています。その代わり、分散させることによって、どの大会でもペースメーカーも準備して、最もコンディションのよい時間帯に走るようにしようと考えました。

——自分のレベルで、記録を狙うのに最高の時間帯で、ペースメーカーもつくようになったということですね。

木路：はい、それを今年試してみます。みんなが少しでもよい条件で走れるようにしたいと思って。それは選手に対してのサービスですね。

海外選手の転戦によって さらなるレベルアップも可能

——シリーズ記録もそれなりの水準ですし、2020年には東京オリンピックも控えています。今後、このシリーズに海外から転戦にやって来るというような可能性はあるのでしょうか？ 日本の選手がヨーロッパを回るような形で、アジアやオセアニアの選手がヨーロッパに行かずに日本に来るということもありそう思うのですが。

木路：今、ヨーロッパでは10000mのレースがどんどん少なくなっているの

で、それをアピールすることができそうですね。

木内：日本の競技場は走りやすいし、気候もいい。ちゃんと記録が出せるようなペースメーカーも用意すれば、高いレベルのレースは十分に可能です。

木路：今までは日本人のための…と思っていたけれど、Aレースを国際大会としてオープンにしてしまう方法がありますね。例えば、持ち記録が27分20秒までしか出られないとか。そこにレースディレクターの裁量で、何人が記録を狙わせたい日本人を入れますよというような形にすればいい。

木内：ちょうど、今までヨーロッパで我々がやられてきた形の逆パターンですね。

木路：日本の実業団に所属しているケニア人選手と、海外から来た選手と、それに記録を狙わせたい日本選手が何





人か入ってやる形で26分台のレースになってくれたら、ものすごくレベルの高いものになりますね。そうってくれば、日本でも世界を体感できる場になるという僕らの元々の思いにも近づきます。

木内：特に10000mはそうですね。でも、中距離については、私はやはり今まで20年以上かけてつくってきた繋がりをなくしてほしくないと思うなあ。

木路：中距離は、ここでしっかり準備をして、そのあとヨーロッパに行くというのが、流れとしてはベストだと思っています。小林史和（NTN）がナイト・オブ・アスレティクス（ヒュースデンゾルダー・ベルギー）で1500mの日本記録を出した（3分37秒42、2004年）のも、ホクレンDCで1000mをやった流れをそのまま持っていけたので。中距離の特に国内トップクラスの選手たちには、準備と強化と記録を出すという流れを戦略的につくるために、このシリーズをうまく利用してもらえたらいいと思います。

木内：海外からの参戦ということでは、日韓競技力向上スポーツ交流として、韓国が第1回大会から参加しています。これはJOCの助成事業で、2002年のサッカーワールドカップの日韓合同開催を記念して、2003年から開始されたものです。また、この選手団とは別で参加する韓国選手も増えています。韓国においては、記録を狙える大

会として、本シリーズが認知されているといえそうですね。

自治体や地元の方々にとってもかけがえのないイベントにしたい

——来年は15回目という1つの節目を迎えます。今後に向けて、何か考えていることはありますか？

木路：「する人」には定着してきたので、次は「支えてくれていた地元の方たちにどう返していくか」ということと、「見る人たちにどう返していくか」ということをもっと考えていきたいなと思いますね。記録を出す大会としては認知されてきたので、これを、運営してくれる自治体や見に来てくれる地元の皆さんにとって、かけがえのないイベントにするにはどんな工夫が必要だろうっていうことに進んでいかなきゃいけないのかなと。

——今後の課題ですね。

木路：出場者にあれだけのメンバーが揃うことは、首都圏でやったとしても、そうはないと思いますから。

——ただ、土別だ、深川だ、網走だ、北見だと、その大会のためだけに、道外の地域から大勢の観戦者が集まるということは難しそうですね。

木内：そこを見込むのは難しいでしょうね。観戦者も増えてはいますがトータルで500～1000人前後。地元の皆さんが来てくださっている感じでしょう。

木路：たくさんの人に来てもらうという目的では、例えば、昼から地元の小学生のレースをやって、その決勝を、メイン種目のAレースとAレースの間に入れるというようなことはすぐにできます。そこに出席できることが、例えば深川だったら、深川の小学生にとってのステイタスになるような、憧れの大会になるような感じになっていけばいいなと思いますね。

——その子が年を取って「小学生のころ、俺は陸上をやっていた、あの大会で走ったんだよ」と、お酒を飲みながら自慢してくれるような…。

木内：オリンピックでも大リーガーでもそうですよね。たまたま子どものときに見たイベントや試合がきっかけで、そのスポーツをやるようになって、今日に繋がっている…というようなことがけっこう多いじゃないですか。だから、陸上教室とか、レースとか、いろいろな形で裾野を広げていければいいなと思います。陸上教室をやってほしいという要望は、すべての地区から出ているので、日程がうまく合って指導できる人が集まってくれば実施しています。

木路：毎年この時期には、これがあるという大会にしたい思いはありますね。

——今後、例えば、イベントと組み合わせるとか地域とうまく連携していくような…。ちょっとしたお祭りみたいな感じで。



① 木内大会統括ディレクターによるMCは、ホクレンDCの名物となっている
② 優勝インタビューを地元の高校生が務める光景
③ メインレース前のサブイベントも増えている
(写真②③は2015年土別大会より)



『地元の行事に入り込むような大会になってもらいたい』 (木路)

『市民運動会とかね』 (木内)

木路: それはもっとやっていきたいですね。地元の行事のなかに入り込むような大会になってもらいたいなと。

——町の盆踊り大会に入り込んでいくとか？

木内: 市民運動会とかね。

木路: そんななかで、子どもが午後7時から町の代表で決勝レースを走るってことになれば、きっと家族揃って来てくれるんじゃないかと思いますね。孫が走るとなれば、きっとじいちゃん、ばあちゃんだって来てくれるだろうし (笑)。そうすれば、ヨーロッパの試合に近づいてくるのかなと思いますね。

——ヨーロッパでは家族で楽しむ場になっていますものね。

木路: そうです。ちょうど運動会を見に来る感じです。ビニールシートを敷いて、ホットドックとかビールとかの店が出て、まずは、息子や娘の運動会を見て、日が暮れてトップ選手が走るときは、家族で一緒にそれを見るんです。そのときにはもうお父さんはいい感じに酔っているという… (笑)。

——北海道ならできそうですね。あの時期の屋外は、本当に気持ちがいいから。

木路: 選手についての準備というのは陸連側でやるので、イベントとしての盛り上げというのは、どんどん地元をお願いしたいなというのはあります。

木内: 盛り上げるための工夫は、各会場ですでいろいろとやってくださっていますよ。

——去年の報告書を拝見すると、それぞれにいろいろなアクションを起こしているようですね。お楽しみ抽選会、かき氷や羊の丸焼きの無料サービス、キッズダンサーによるダンス披露、マーチング演奏…。深川大会では、日本新記録更新で深川産牛肉1頭分プレゼントなんていう賞品も用意されているのですね。

木路: そうですね。優勝選手へのインタビューを地元の高校生にやってもらったり、大会中にかける音楽を選んでもらったりといったこともやっています。

木内: インタビューは士別でやっていたよね。

木路: はい、質問する内容を、一所懸命に考えてきてくれていて、すごくよかったですね。

それぞれが各々の立場で
活用法を考え、役立ててほしい

——このシリーズは、メインスポンサーということで初回の2003年から、ホクレンが協力しています。これも継続していくうえでは非常に大きな力ですよな。

木内: はい。本当にありがたいことです。

木路: 今後という点では、冒険ができる大会なので、使いやすいように使っていただけたらと思います。日本選手権だったらちょっと無理というようなことや、今までにやったことのないようなことであっても、実験的にやってみましょうかということが可能だと思いますので。

——大きな力といえば、運営にあたってくださっている陸上競技協会の尽力も忘れることはできません。

木内: 主催は北海道陸協さんですが、実際に大会運営にあたるのはそのなかの地方陸協さんです。毎年大変だとは思いますが、日本を代表するような選手が多数出場する大会の運営を行うことで、ご自身の技量を上げてもらえたら…。2020年東京オリンピック・パラリンピックに好影響を及ぼすような審判の育成や運営などに繋がっていくのではないかと思います。

木路: 毎年レベルが上がっていますと言ってくださるところもあります。ありがたいことだし、役に立っているのだという点では嬉しいですね。

——合宿を兼ねた関係者の滞在による地域貢献という点ではいかがでしょう？

木路: このシリーズを実施したことによって、北海道での合宿希望が増えたのかということを検証する必要があると思いますね。

木内: 増えているんじゃないのかな。一時期より海外へ行くチームが減って来ているように思います。テロの問題などもあって、実業団の場合は会社としての判断などもあるでしょうし。国内回帰みたいな面もあるのではないかな。

——増えていれば、ホクレンDCを北海道で実施した目的の1つが達成できますね。

木路: そうなんです。だからもっともっと活用していただければなと思います。例えば、懇親会とかナンバーカード受付の前後とかなどで、合宿地紹介ツアーみたいなものを組んでくれても



かまわないと考えているんです。練習に使ってもらいたいコースを回ったり宿泊や練習施設を案内したりとか。「ロードにびったりの、新しい農道ができました!」といったように。

木内: 選手やコーチに相談したり、アドバイスもらったりする場にしてみたいですね。「こういうコースにしたいが、どう手入れすればいいでしょう」とか。

木路: 映像を使ってもらってもいいと思うんです。そういう話をできる場として使ってもらえたらと思います。初めて来る選手やチームもいるわけで、懇親会で施設のレクチャーを受けたことがきっかけで、「じゃあ、ここで合宿を張ってみようか」というようになったらいいなと。

——そうやって考えると、大会運営ということだけでなく、まだまだ工夫できる余地がいっぱいありそうですね。

木路: そう思います。強化は強化、地元は地元、観客は観客、そして選手は選手で。

木内: このシリーズの活用方法を、皆さんがそれぞれの立場で考えて、どんどん使ってほしいですね。それこそが、このシリーズを続けていく大きな意義となってくるはずですから。

——このシリーズの名物、木内大会統括ディレクターによるMCも続いていく？

木内: さらなる活性化を目指して、今年はサプライズがあるかも。お楽しみに! (笑)。

(2016年6月17日収録)